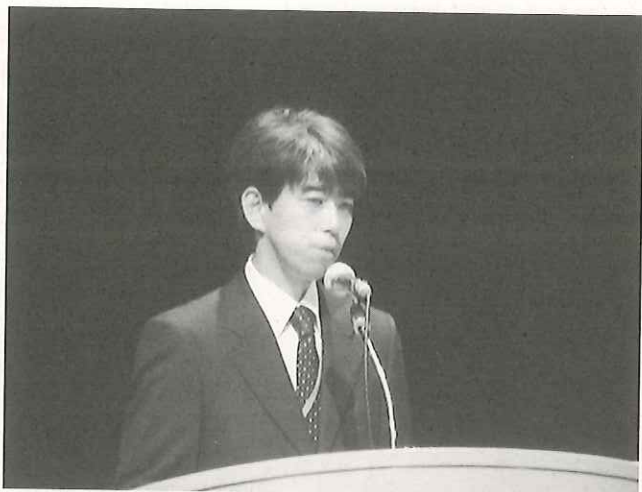


口頭発表「幼稚園における動物飼育と保育への展開」

～実践例を通して～

北口裕之



太平寺幼稚園は大阪府堺市の南部に位置し周囲を田んぼで囲まれるなど自然環境に恵まれた幼稚園である。以前より、ウサギやニワトリ、カメなど多くの動物を飼育していたが、平成11年より大阪府私立高等学校等特色教育振興モデル事業として、『幼稚園における羊の飼育とその保育への活用』を実施するに当たり、今までの動物飼育を見直し、子どもの身近な環境としての動物飼育を考えた。

1 子どもの身近な環境としての動物飼育

本来、人間の生活や発達は、周囲の環境との相互関係によって行われるものであり、それを切り離して考えることは出来ない。特に幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期である。したがってこの時期にどのような環境の下で生活し、その環境にどのようなにかかわったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味を持つことになる。

幼稚園教育においては教育内容に基づいた計画的な環境を作り出し、その環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって子どもの発達を促すようにすること、すなわち『環境を通して行う教育』が基本となる。

幼稚園で飼育される動物もその環境の一つである。よって、飼育するときは、一人一人の子どもの中に何を育みたいのか、どのような経験を必要としているのかを明確にし、意図をもって動物飼育を保育に取り入れる必要がある。

2 教師の役割

幼稚園で動物を飼育し保育に展開するに当たって最も大切なのは、実際に子どもに接する教師の役割である。子どもたちは幼児は教師や周囲の子どもその環境にどうかかわるかを見て学んでいく。家庭などで自然と余り触れたことのない子どもは、まさに教師の触れ方や世話の仕方から学んでいくことになる。教師が生命を大切にするかかわり方をすれば、子どもそのようなかかわり方を身に付けていくだろう。その意味で教師は自分自身の自然や生命へのかかわり方が子ども幼児に大きな影響を及ぼすことを認識する必要がある。子どもに真似をされるにふさわしいことはもちろんですが、子どもに真似をされるにふさわしい考えや思いを持ってゆったりとしたリズムで生活をしていることが大切である。

3 家庭との連携

幼児はまわりの大人すべてから影響をうけるので、家庭の人に幼稚園の教育方針や意図を知ってもらうことはとても大切である。保護者会やプリントなどで幼稚園がどういう意図を持って保育に取り組んでいるのかを知らせ、理解してもらい、時には参観等で実際に保育を行っている場面を見てもらう。家庭と手を取り合いながら、子どもの気持ちを大切に育てていくことが重要である。

また、動物アレルギーやアトピーがある園児については、保護者と相談の上、どの程度なら触れ合うことが出来るか、状況を見ながら判断している。

4 子どもがやりたいという気持ちに

保育の展開において、幼児が自ら活動に取り組むためには何よりも幼児がやってみたいと思う活動に出会う機会がなければならない。

それには周りにいる大人がゆったりとした気持ちで、していることを見せてあげるのが良い。本園では動物の世話は基本的に教員がしているが、自分の身近な大人が動物の世話をしている風景を見ることによって、子どもの中に自分も同じ事をやってみたいという気持ちが生まれてくる。

また、年中児は年長児がヒツジの当番をして

いるのを見て、年長さんになったらヒツジ当番が出来るという前向きな気持ちが出来ており、年長児は喜んでヒツジのお当番に参加している。

これと同様に教員が、子どもには難しい羊毛を梳いたり、毛糸にしたりという作業を子どもたちの前でしていると、次々と『これ何に使うの？私もやってみたい！』と子どもたちが次々とやって来て手を出す。

《させる》ことによって、子どもたちの自ら育っていこうとする芽を摘まないようにしながら、その芽が伸びるように支え、見守り、そして時には導くようにしたい。

5 本園の動物飼育に対する教育的意図

- (1) 動物と直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、動物とのかかわりを深めることができるようにする。
- (2) 動物にから得た感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにする。

6 各学年の取り組み

(1) 年少児（3～4歳）

目標：幼稚園の動物に慣れ、親しみをもって接する

年少児の中には幼稚園の飼育動物が生まれて初めて接する動物である子どもも多く、その時の初体験がその後の子どもにとって与える影響は大きい。噛まれたり、引っ掻かれたりと嫌な体験をしてしまえば、その嫌だった思いは後々まで心の中に残ってしまい、動物嫌いになってしまう可能性もある。また、動物に対して優しく接することもまだ難しいので、子どもと動物、両者に危害が無いよう、子どもが動物に接する時は、保育者が必ず付き添うようにしている。

(2) 年中児（4～5歳）

目標：動物に愛着をもって接する

2年保育の園児も多いため、動物や子どもに危害のないよう、保育者は細心の注意を払っている。園外への散歩の際にウサギやヒツジにあげる草を取ってきてあげたりと動物と関わる時間を多く取り、子どもたちが愛着をもって動物と接することが出来るようにしている。

(3) 年長児（5～6歳）

目標：動物の気持ちになって考える

教室内でウサギの飼育を行い、自由遊びの時

間などでは自由にウサギと接している。日常的な動物の世話は保育者が行うが、当番制で、ヒツジの掃除、餌やりを行う事により、動物の世話を直接体験している。設定保育でウサギを抱いたり、聴診器を用いて自分の心臓の音と比べてみて、ぬいぐるみと、生きているウサギではどこがどのように違うのかを話した。

6 太平寺幼稚園の飼育動物

幼稚園では、ウサギ、ニワトリ、アイガモ、ヒツジ、ザリガニ、カメ、川魚、カブトムシ、スズムシなどを飼育している。ヒツジを除いてはどれも、貰われてきたり、子どもが捕ってきたりしたものである。余り、突飛なものは飼わない様に、子どもに馴染み深い動物を飼う様に心がけている。

以前は、教室から遠く離れた園庭のすみにウサギ小屋があったが、子どもが日常的に動物と関われるよう、ケージ飼育とし、職員室前および年長児の教室に置いている。

また、子どもが最も良く遊ぶ砂場に近いところに池を作って囲いをし、その中でカモやニワトリを飼い、ケージ越しに餌をあげることが出来るようにしている。その他、魚やカメ、ザリガニなどは子どもが最もよく目にするであろう、職員室前で衣装ケースなどを利用して飼育し、子どもが見やすく、また触れることができるようにしている。

7 幼稚園におけるヒツジの飼育について

本園では平成11年より、大阪府私立高等学校等特色教育振興モデル事業として、ヒツジを2頭飼育し、保育への活用を行っている

(1) 事業の内容について

①事業のテーマ・目的

自然に対する正しい知識や基本的概念を直接体験することにより得る。

人と動物（自然）の関係を長期的な家畜の飼育によって体感する。

②事業実施に当たって特筆すべき点

緬羊は、古くから人間によって家畜化され、その羊毛、肉、乳等が利用されてきた事は既に知られているとおりである。今回当園に緬羊を導入したのは、ペットとしての情操教育の目的のみではなく、家畜としての古くからあった人間と動物との関係について直接体験する事により感じとってほしいと考えている。

8 何故、ヒツジなのか？

緬羊の利点としては、その導入及び飼育が比較的容易であること、飼育、観察に危険の少な

いこと、餌代等の維持コストが安いこと、人畜共通の病気が少ないこと、そしてその羊毛を園内の制作等、実際の保育に活用できる事により、動物と人間との関わりを直接的、具体的に体験できることなどが挙げられる。

ヒツジから毛が取れ、それが実際に自分たちにとって役に立つものになるということを知るといふ目的のみなら、動物園に行ったり、牧場に行ったりすることによっても同様の体験ができ、レンタル飼育という方法もある。

しかし、前者の場合は、子どもたちがヒツジを身近な存在としてとらえ愛着をもって接することは難しい。また、動物レンタルの必要があるときだけ動物を飼うという『大人の姿勢』は問題があるように思える。安易に動物を飼い、いらなくなったら捨てる大人が増えていると聞く。動物飼育するということは責任があり、手もとられ、大変なことだが、そういった事を子どもに見せてあげ、感じ取ってもらうことが心の教育につながっていくと考えている。

9 羊毛を用いた保育

園児達の身近な動物である羊から取れた毛を実際に使う事により、動物と人との関わりを深める。また、羊毛を使いフェルト制作や人形制作を行い、プレゼントしたり、自分で使ってみる事を通して自然とのつながりを感じる。そして、毛がり、洗毛、染色、毛梳きなどの作業を通してものが出るまでのプロセスの大切さを感じる。これらの作業は非常にメンタルケアの力が強いものであり、加えて、年長児が取り組む織物は思考を組み立てる力を育むものである。

10 ひつじ当番



年長児になるとヒツジのお世話をするヒツジ当番があります。毎日グループ毎に交代で、先生と一緒にヒツジのお世話をします。始めて接

する大きな動物に恐々としていた子どもたちも今では、すっかり慣れて大の仲良し。手からえさをあげたり、ヒツジにほほずりしたり・・・くさいくさいといいながらも、きれいになったら気持ちいいね。ここにもまだあるよ！一生懸命掃除します。みんな次の番が来るのを楽しみにしています。

11 羊毛を用いた制作

ふあふあのヒツジの毛をきれいに並べて、石鹸水をかけて、ごしごし、きゅっきゅっ！もういい？まだまだ。あと何回？あと100回！よーし1、2、3・・・みんなで声をそろえて頑張ってこすったら、素敵なフェルトが出来上がりました。誰にプレゼントしようかな？



今日は自分で作ったフェルトの帽子とリリアン編みのマフラーをつけての雪遊びです。とても可愛らしくできました。

ヒツジさんありがとう。



12 子どもたちの変化

ウサギの教室保育をするようになり、子どもたちはクラスに新しい友達が増えたように喜んでいて。興味のない子どももいるが、遊びの輪の中にウサギがいる光景も徐々に増えてきた。

『あまり遊びすぎると疲れちゃうから、10分だけにしようね。』という言葉にこどもたちは素

直に理解をすることが出来た。はじめは抱くのが下手でウサギが暴れてしまい引っかき傷だらけになっていた子どもも、優しくウサギを抱くことが出来るようになった。

教員の方にも変化はあった。クラスのウサギが死んでしまった翌日、子どもたちにその事実を話した時、教師の目から涙があふれた。始めはウサギを教室に持っていくのに反対していた教師だ。子ども達も心から悲しみ、一緒に泣く子どももいた。子どもたちの心の中に命に対する尊い気持ちが芽生えていたのかもしれない。

13 ヒツジを飼育してからの変化

最初は大きなヒツジを怖がっていた子どもも、普段から接しているうちに怖がらなくなってきた。お当番の際も、うんこきたない！と言っていたが、次第に、きれいに掃除してあげようという気持ちが強くなり、丁寧に掃除することが出来るようになってきた。人と動物（自然）の関係についてどこまで理解できているのかは分からないが、ヒツジから取れた羊毛を使って色んな物を作り、それを身に付けたり、人にプレゼントしたりすることによって、ヒツジからとれた羊毛が人の役に立っていることは自信を持って言えるようになった。

14 保護者の変化

ゲームを買うよりも、動物を飼いましょう。そんな幼稚園の呼びかけに多くの人が賛同してくれ、幼稚園で生まれた鈴虫を分けてあげたところ、沢山の方が応募してくださり、大変うれしく思いました。

また、ヒツジを飼うようになり、急に入園希望者数が増えてきた。飼い出す前と比べて約50名の増加。幼稚園周囲で宅地開発が進んでいることもあるが、保護者の中にも躰や知育よりも子どもの心を豊かに育てたいと思う気持ちが強くなっているのだと思う。

【質疑応答】

<動物園関係者>

ヒツジを飼うことによって、効果があることはわかりましたが、一方でちょっと気になることがあります。果たして、ヒツジを飼う必要があったかどうかお聞きしたいです。つまり、ヒツジを飼うということはそんなに簡単ではないのではないかと思います。たとえば、ヒツジが飼われているところに子どもたちを連れて行って、ふれあわせるといことではだめなのでしょうか？もっと身近な動物を飼う方がよい

15 今後の課題

幼稚園における飼育動物の保育への活用は、その環境設定もさるものながら、子どもの周りの大人の影響が大きい。太平寺幼稚園でも、教員研修等で動物との接し方、子どもへの対応等を話し合っているのだが、やはり、動物好きの教師とそうでない教師では、動物への関わり方が違ってくる。いくら子どもの前では、可愛いねと言ったり、愛着を持って接しているように振舞っていても、どこかで動物を避けているのが出てしまい、子どもはそこを感じ取ってしまうだろう。人間の嗜好の問題なので仕方の無い話なのかも知れないが、子どもの目に見えない部分を育てたいと思っている以上今後の課題としていきたい。

同様に、家庭における保護者の影響も見過ごせない。園の方針や考え方を知ってもらうように努力はしているのだが、興味、関心の無い方がいるのは事実で、家での時間をゲームやテレビで過ごしている子どもも多い。いくら園で子どもが色んな体験し、教師が話をしても、『家でおかあちゃんがこう言っていた。』で台無しになってしまうことがある。子どもが、一番信頼し、安心できるのは教師ではなく、家庭の親である。今度も、色んな形で、情報を発信し、幼稚園のことを知ってもらえるように努力していきたい。

現在、幼稚園では、飼いやすく、子どもになじみの深い動物、保育への活用が出来るということで、ウサギ、ヒツジを中心に飼育をしているが、あまりコミュニケーションが取れる動物でないのも事実で、犬など、もっと感情が分かりやすい動物を飼育し、子どもとのふれあいに活用してみたいと考えている。

(学校法人北口学園太平寺幼稚園理事長)

のではないかと思います。

<北口>

まず、長期的な飼育を通してということの基本に据えて、身近で長く飼育することを第一に考えています。ほかの動物では、飼うことだけで終わってしまっていて、保育への転用がしにくいと考えています。その点ヒツジですと、世話をする代わりに羊毛をいただけるということを実感することができ、飼うことによる、より高い保育効果が期待できます。

<中川>

北口先生は獣医師であると伺っています。だからこのようなことができたのではないかと思います。今、幼稚園はお子さんが少なくなっている中で、この活動によって園児が増えたということはよいことではないかと思いました。

先ほど質問した方のおっしゃるとおり、ほかの動物でも十分に教育効果は得られると思いますが、北口先生はそれ以上の効果を得るために、このような実践をされているのだらうと思いました。

やはり、ヒツジを見に行くだけということは、動物への愛着を感じるということでは、効果が薄いと思います。

北口先生は、獣医師であるからこそ、このようなことができたと思いますが、ほかに獣医師のサポートはありますか？

<北口>

ヒツジを導入するにあたって、友人や先輩の獣医師に相談をしたり、協力をいただいたりしています。

確かに、獣医師だからやりやすかったという面はありますが、近所の方に聞いたところ、十年、二十年前には、この辺でも普通にヒツジ、ヤギ、ウマなどがいて、生活する中で自然にそのような動物たちとふれあうことができて、人間と動物との関係について学ぶことができてい

たのではないかと思います。

<大阪・中川>

2点ほど質問があります。まず1点目は、尿尿の処理はどのようにされているかということです。もう1点は、私の知る限り、偶蹄類を飼育すると、咽頭部の発赤など、ひどいアレルギーを起こすことがあります。そこで、子どもたちのアレルギーのチェックをどのようにされているのか伺いたいです。

<北口>

ヒツジの運動場に砂を敷いてありますので、尿はそのまましみ込んでしまいます。糞は、箒で集めて堆肥化して、それを用いて草花などの肥料にしています。

アレルギーの問題については、確かにアレルギーの子どもが最近多く、保護者が心配して相談してきますが、基本的には様子を見ながら対処していきましょうということにしています。そして、動物をさわったら必ず手を洗わせています。また、幼稚園の制服はウールなので、それにかぶれたりしなければ大丈夫ではないかと説明しています。それでもアレルギーが出てしまう場合は、動物にはさわらないで遠くから見ているように、子どもに直接話して聞かせるようにしています。このことは一生の間つきまとうことですから、早いうちから理解させておくことが必要だと思います。

